| No.24 | 踏み出し | | |
|---|---|---|---|
| 氏名 | 辻　俊成 | 文学研究科 | M1 |

## １．出願時のテーマ･目標を具体的に記述してください。

テーマ：京都太秦地域における「時代劇」関係者のオーラルヒストリー作成　目的･内容：本活動は、京都太秦地域における「時代劇」関係者への聞き取り調査を行い、オーラルヒストリー作成を試みるものである。今年度の目標は、東映京都撮影所で長年映像制作を行うとともに、本学映像学部にて指導を行う方への聞き取りを行い、その成果を発信するものである。この活動は、「時代劇」制作に関する、知識や記憶を保存し継承していくことで、「時代劇」文化の継承の一助となり、他の表現文化への影響も示唆される。

## ２．上述のテーマ･目標を実現するために実施した計画を具体的に記述してください。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響に十分に配慮しつつ、上述のように東映京都撮影所関係者である谷慶子氏（記録部）、深沢伸行氏（撮影部）、松陰信彦氏（録音部）にzoomを用いた聞き取り調査を行った。そのインタビュー内容を文字起こしし、自身の修士研究や、立命館大学アート･リサーチセンターにて行われている研究拠点形成支援プロジェクトと絡めながら成果発信を試みた。映画の復元と保存に関するワークショップ2021や、第10回知識･芸術･文化情報学研究会、文部科学省　国際共同利用･共同研究拠点「日本文化資源デジタル･アーカイブ国際共同研究拠点」･ 研究拠点形成支援プログラム　研究プロジェクト／2020年度成果発表会にて、本プロジェクト成果の一部の口頭報告を行った。

## ５．今回（今年度）の取り組みについて、今後の活動展開と展望を記述してください。

本年度の聞き取り調査を行ったことで、演出を担う制作者への聞き取りの必要性も明らかとなった。例えば、深沢氏･谷氏のインタビューから、「時代劇制作における美術打ち合わせの重要性」が語られた。時代劇では、原則として画面に映り込むすべてのものを作る必要があると言われており、特に画面の大半を構成する美術の準備にはよりエネルギーと時間をかけるといった事実を見出すことができた。今後は、調査対象者の選定範囲を拡大し、より時代劇制作に関する聞き取りを広く行いたい。

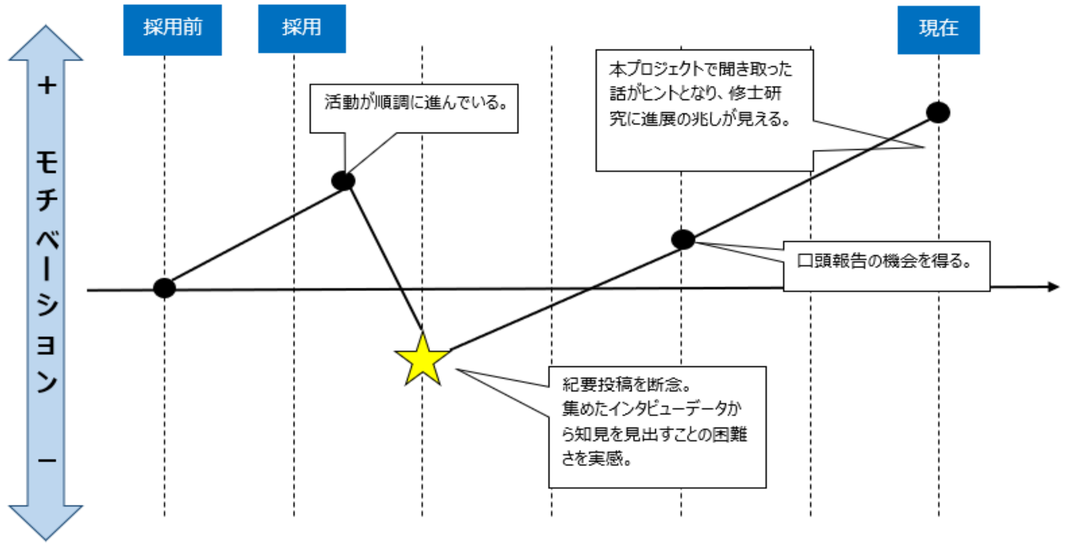
## ６．今回（今年度）の取り組みは、今後の学びや進路にどのように影響しますか。

本年度の取り組みは、3-3でも記載したように、正課の学びとの相互作用が非常に強かった。そのため修士研究を行うにあたってのヒントを本年度の取り組みから得ることができた。修士研究は私のメインの研究であり今後の進路（博士後期過程進学を希望）での活動において根幹となるような強い影響があると考えられる。

## ７．今回（今年度）の活動が周囲に与えた影響（社会･周囲）への貢献･還元の点で記述してください。

今回の実戦を通じて、聞き取りというアクティビティの実践例を示すことができたことが、周囲への還元である。聞き取りを行うには、調査の設計からアポ取り、実際のインタビューや文字起こしなど様々な手順を経る必要がある。また、そうしたイメージが掴めず踏み出すことを億劫に感じている後輩も少なからず存在する。実際、私の所属する研究室でも同様の悩みを持つ人がいた。そこで、このアクティビティの紹介を行い、自身の経験を伝えることで自分もやってみようという気持ちになったという。そうしたことから、自身の実践やその経験を周囲に伝えることによる還元ができたと考えている。

3．個人の成長の軌跡3-1．取り組みの過程でどのようなことがあったのか、グラフを作成してください.




3-2．グラフで書いた☆（個人がもっとも成長したと思うポイント）では、その過程で学んだこと、気づいたことについて具体的に書いてください。

インタビューそれ自体の進捗度合いとしては概ね順調であったが、アウトプットの計画を紀要投稿などと高く設定していたため、そこに行き着けないもどかしさがあった。紀要投稿を断念したことで、モチベーションがかなり下がったが、指導教員をはじめ周囲の人からのアドバイスを多く受け、年度末に開催される報告会での発表に照準を切り替えたことで結果としてはプラスの方向に進んだ。このことから、掲げた目標を柔軟に修正することの重要性を学んだ。

3-3．”今回（今年度）の取り組み”と“正課の学びや取り組み”は、どのような関連や影響（相互作用）がありましたか？

本プロジェクトと正課の取り組みには非常に強い相互作用があった。もともと本プロジェクトは、自身のメイン研究の弱点とも言える人の記憶やエピソードに着目したものであり、メイン研究との親和性は高いものと考えていた。しかしながら実際にプロジェクトを実行すると、聞き取った話がヒントとなり、メイン研究のテーマが定まるといった経験や、メイン研究で疑問に感じていた点が聞き取り調査で得た内容によって明らかになるなど、想定していたよりもダイレクトな相互作用を発揮した。こうした点からも、従来までの表現文化とは異なる生きた芸術とも言える”時代劇”を対象としている強みを見出すことができた。

4．本奨学金を受給したことで、以下の項目についてどのような影響を与えたか５段階で評価してください。（該当ナンバーに○）
また、併せて評価の理由も書いてください。 評価例：【 1（達成できなかった） ← 3（どちらともいえない） → 5（達成できた） 】

| | |
|---|---|
| ①　目標の達成度 | 4 |
| ＜理由＞インタビューそれ自体の進捗度合いとしては概ね順調であり、アウトプットの計画を紀要投稿から口頭報告へと切り替えた点を鑑みた評価の上、達成度を４とした。 | |
| ②　計画の達成度 | 4 |
| ＜理由＞上記と同様に、中間地点での目標の軌道修正を行ったことで、概ね順調に達成できたのではないかと考えている。サブ目標として計画していた、ノンフィルム資料収集の動向調査についても、国立映画アーカイブは断念し、京都市内の調査に切り替えたことにより、こちらも概ね順調に進めることができた。 | |
| ③　取り組みを通じた自己成長 | 5 |
| ＜理由＞失敗も含めた成長という観点から考えると、前期と同様にであったと考えている。例えば、インタビュー調査の場合は、オンラインでの調査であったため、相手の話をうまく聞き取るということにおいて、対面式よりもかなりの困難さがあった。しかし、回を重ねるごとに、オンラインでのインタビュー調査に有効な話の間合いを感覚的につかめたことも感じた。 | |

10．今年度の取り組みを通じて最も身についたと思う力について、具体的に記載してください。9の設問で回答した力でも、それ以外でも構いません。

①　身についた力

軌道修正を行える力

②　①で記述した力について具体的に説明してください

目標と現時点での状況との差分を適切に把握したうえで、最初に掲げた目標に無理に固執せず、本来やりたかったこと･やるべきことに立ち返り、目標や方法の軌道修正を柔軟に行えるという力。

③　なぜその力を身につけることが出来たのか、成長を手助け･促進させた要因を記載してください

大きな要因は新型コロナウイルスという未曾有の危機に直面したことだと考えている。2020年度の冒頭より、大学に入れない、対面での活動ができないというかつて経験したことのない状況に直面したことによる負の側面が多くあった一方で、オンライン会議システムが普及したことによって遠隔の人とも会話ができるという正の側面も実感した。こうしたことから、本質的に重要なポイントを見極めて実践を行うことの必要性を嫌でも行う状況になったことから、軌道修正力が向上したと考えられる。